

上林チェーンベース建設予定地内試掘調査報告書

上林中道南遺跡 II

1995年1月

長野県下高井郡
山ノ内町教育委員会

上林チェーンベース建設予定地内試掘調査報告書

上林中道南遺跡 II

1995年1月

長野県下高井郡
山ノ内町教育委員会

序

上林中道南遺跡は、山ノ内盆地の沓野台地の上方に位置し、国道292号線を志賀高原に向う、旧料金所西側の農耕地と、山林に所在する遺跡であります。

この遺跡は、竜神社地を源として、多量に湧出する竜宮川と関係深く、広大な山岳地帯を背後とした遺跡と推定されます。縄文草創期の頃より人々の生活の場として、最も恵まれた環境の地であったと考えられます。

人類が煮たきの生活用具として土器を作り、使い始めた、いわゆる縄文草創期からの遺跡として当町はもちろん、県下でも重要な遺跡の一つであります。

この地域に、志賀高原へ訪れる年間500万人のスキヤーの交通対策と、志賀高原で生計を営む人達の冬期間の交通安全と、車の渋滞解消のため「上林チェーンベース」建設計画が、中野建設事務所から提示されました。

これらをふまえて教育委員会では慎重に対処し、町文化財保護審議会の意見を求め、さらに県文化課のご指導をいただき発掘調査が実施できるにいたった次第です。調査は初雪も舞う11月10日から16日までの間に行なわれました。

この調査にご協力いただき調査報告書をまとめていただきました檀原長則団長をはじめ、地元沓野区の調査員各位、また、調査実施にあたりあらゆる面でご協力を願った皆様方に感謝申し上げ、深甚なる敬意を表して序文と致します。

平成6年12月

山ノ内町教育委員会

教育長 小布施竹男

例 言

- 1 本書は長野県下高井郡山ノ内町大字平穏(沓野)字上原と、一部桑山道南に所在する上林中道南遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 遺跡名は地籍名と異なっているが、周知の遺跡範囲のため、そのまま踏襲した。
- 3 試掘調査はこの遺跡の範囲に「上林チェーン着脱場(ベース)」建設のため、発掘調査の基礎資料を得るために行った。
- 4 試掘調査は中野建設事務所の委託をうけて、山ノ内町教育委員会が調査主体者となり、1994年11月10日から16日まで現地調査を行い、以後社会体育館で、報告書作成にむけて整理作業と、原稿の執筆を行った。
- 5 本書の執筆は檀原長則と小林貞信が行い、図版の整理は関伊志雄・小林延秋・浦野貢が行った。
- 6 遺跡周辺の踏査、採集遺物の掲載については、関伊志雄の協力を得た。写真撮影は小林貞信と檀原長則が行った。
- 7 出土遺物と図表類は山ノ内町教育委員会が保管している。

本文目次

序	
例 言	
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
1 位置及び自然環境	5
2 歴史的環境	7
第Ⅱ章 発掘計画	
1 開発計画と経過	11
2 調査団の構成	12
3 調査日誌	12
4 土層状況	15
第Ⅲ章 遺 物	
1 縄文時代	19
(1) 早期押型文系土器	19
(2) 早期条痕文系土器	22
(3) 撚糸文の土器	22
(4) 縄文の土器	24
(5) 竹管文の土器	24
(6) その他の土器	24
(7) 石 器	25
2 平安時代	25
(1) 土 器	25
第Ⅳ章 ま と め	
1 遺物からみた遺跡の性格	26
2 今後の調査計画について	27

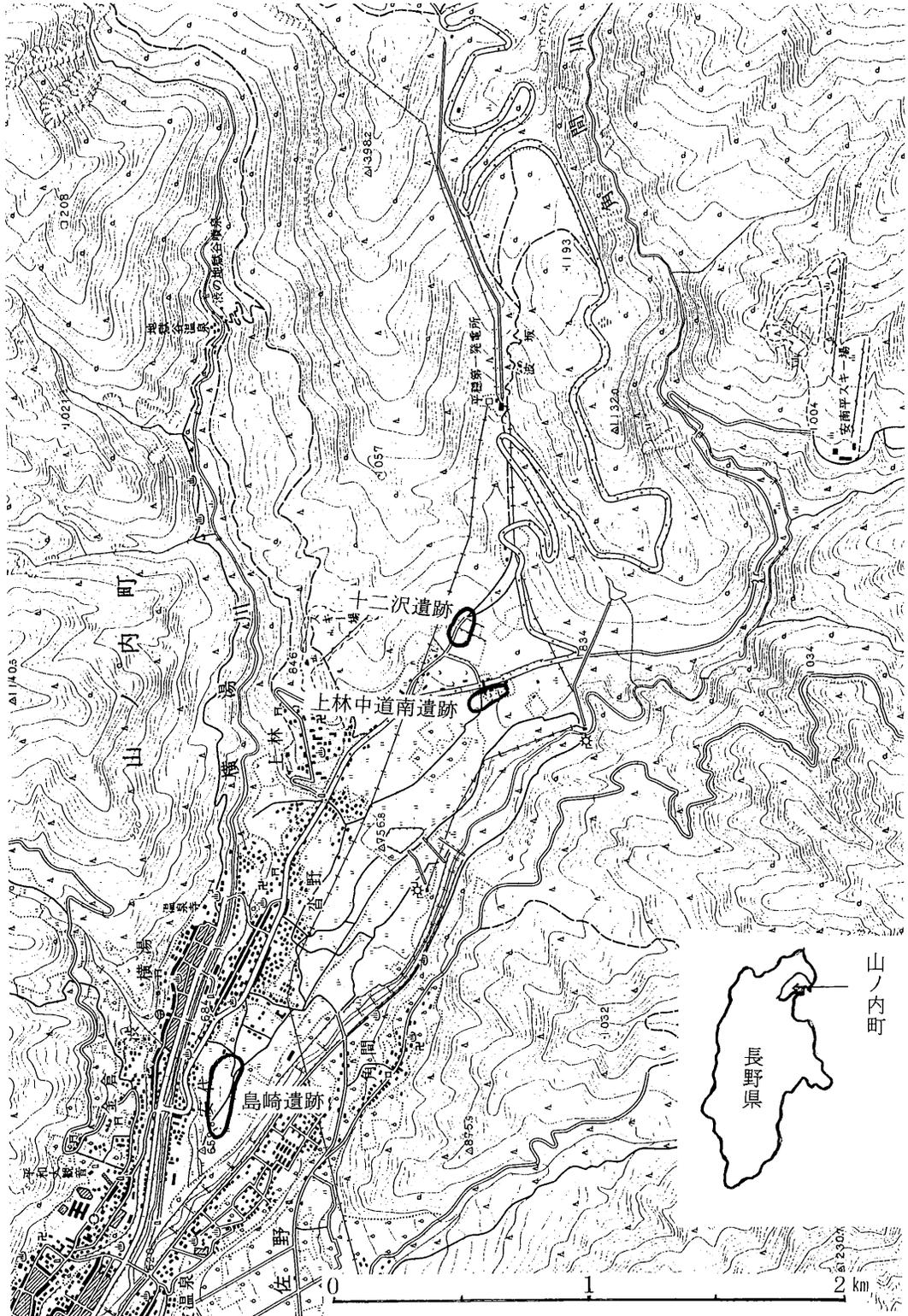
写真図版

挿図目次

第1図 上林中道南遺跡の位置図	4
第2図 遺跡の範囲推定図	6
第3図 十二沢遺跡出土土器拓影図	9
第4図 遺跡の確認トレンチ設定図	10
第5図 遺物確認範囲実測図	13
第6図 トレンチ地層断面実測図	17
第7図 発掘予定地の土器検出状況	18
第8図 土器拓影図(1)	20
第9図 土器拓影図(2)・実測図	23
第10図 石器実測図	25

表 目 次

表1 試掘調査遺物出土表	15
表2 出土土器分類表	15
表3 土器観察表(1)	21
表4 土器観察表(2)	23



第1図 上林中道南遺跡の位置図

第 I 章 遺跡の位置と環境

1 位置及び自然環境

山ノ内町は長野県の東北端に位置し、山ノ内盆地を形成する800m以下の平地は7分の1と少なく、大部分は山岳地帯である。この志賀高原の山麓にある上林中道南遺跡は、昭和59年(1984)沓野区圃場整備事業にともない、発掘調査が行われている。

この遺跡は292号線志賀～草津道路の旧上林ゲート西の下段にあり、縄文早期、前期、平安時代後期の土器と、住居址が検出されている。

今回の調査は、この発掘地点の南方に、約12,000㎡のチェーン着脱場を長野県が建設するための緊急発掘調査で、計画された範囲は、大字平穏字上原238・244・256・257・258・259・260・261・262・264・265・271・272・273、字桑山道南527・528などの地番が該当する。しかし現時点で、事業計画に同意が得られない所が5筆存在する。

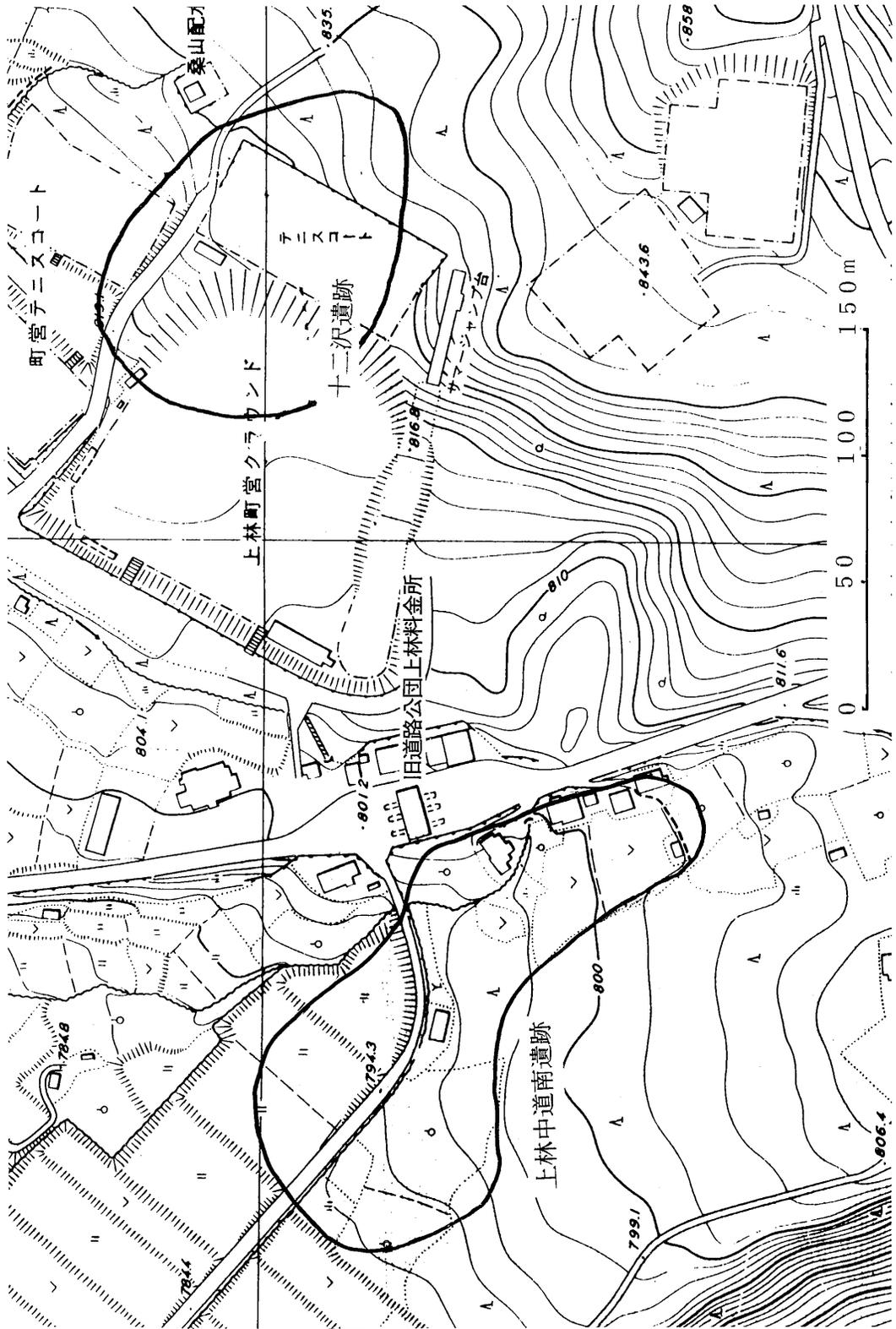
上信国境の横手山(2,304.9m)方面に発する角間川(上流は硯川)と、大沼池方面に発する横湯川が、山あいを抜けて合流し、夜間瀬川となる。この合流地点上の台地を通称島崎といい、この沓野の台地は、おおよそ三角形を呈し、両川に挟まれて存在する。

この沓野台地の段丘崖は、はるかなる地質年代に、山ノ内盆地地面を埋めて形成した旧扇状地の土砂をこれらの川が、下刻作用を行った結果、形成されたものである。遺跡南方の角間川の段丘崖は、50mの落差がある。

この台地の基部ともいふべき、志賀高原への上り口、標高800m前後に遺跡が存在する。この東方には、天川神社所有地の山林があり、ここに清冽な清水が大量に湧出し、小川となって遺跡を貫流し、竜宮川と呼んでいる。また、この川と、遺跡地で交差している坪根堰は、明治18年(1885)地獄谷から引水されたものであり、この竜宮川は、沓野集落の成立にかかわる川である。

上信国境の山々は利根川水系と、千曲川水系の分水嶺をなしている。近世以降、菅平高原を通じる大笹街道と、中馬稼ぎで論争があった、群馬県草津までは、硯川沿いの旧道を通り、最高所渋峠(標高2,100m)を越えて行程28kmで、馬に荷を積んで朝6時に沓野を発って、午後3時には草津に着いたといわれている(『沓野民俗誌稿』1981)。

この遺跡にたてば、西方は山ノ内盆地から、北信五岳の山々を望み、南も北も1,000mから2,000mの山々につらなり、東の志賀高原の山なみに合している。この恵まれた自然を背景として、原始時代以降営まれたのが、この上林中道南遺跡である。



第2図 遺跡の範囲推定図

2 歴史的環境

かつて志賀高原の木戸池付近から石刃が発見されたという報告があり、戦後間もなく新湯田中温泉の夜間瀬川に面した崖から、頁岩製の石刃が発見されている。また昭和42年(1967)には沓野の中道間(上林中道南遺跡のうち)の地下1mの黄色土層から黒曜石の石核が土壌検定の作業中発見されている。このように山ノ内地方でも旧石器時代の遺物が発見されており、今後の調査が期待されている。

縄文時代の草創期・早期の遺跡は、この上林中道南遺跡と、高社山麓の前坂周辺の遺跡、須賀川盆地の下明神遺跡などが知られている。この草創期から早期にかけた遺跡は、まだ発見例が少なく、調査した中道南遺跡は県下でも注目されている。

前期の遺跡は、隣接する十二沢遺跡から始まって、山ノ内盆地の各地に散在しているが、とくに大遺跡としては存在していない。中期の遺跡は加曾利E式平行期のものが多く、同じ台地面の島崎遺跡は、これが主体である。

後期の遺跡で知られているのは、伊勢宮遺跡で、ほかの遺跡は小規模である。晩期の遺跡は、国指定史跡の佐野遺跡が知られている。これは中部高地の晩期の標式遺跡で、東北地方からの移住集団の遺跡との説がある。しかしそのほかの遺跡では、土器片の発見などで、具体的に不明である。

弥生時代の遺跡は、山ノ内盆地の中野市よりの標高500m前後の地帯にみられるが、600m以上の地帯には、みられないようである。したがって沓野台地には存在しない。この地方の開拓が始まったのは、古墳時代も後期になってからで、横穴式石室古墳が湯田中・戸狩・本郷などに存在する。

奈良時代も過ぎて平安時代も後期になると、山ノ内盆地の各地に、当該期の遺物が出土し、開拓の歴史が本格化したことを示している。しかしこの上林中道南遺跡の性格は、これらの遺跡とやや異なっていたと推定している。この時代の終わりころの大治5年(1130)に造られた金倉の弥勒石仏は、後の文治2年(1186)の『吾妻鏡』にみえる金倉井の牧の全盛時代の遺産と考えられている。

室町時代の中期までには、田中・金倉・沓野などを領域とした、この牧場も開拓されて、沓野の台地の下手に「奥長倉」と呼ばれる集落があったと、『諏訪上社造宮帳』に記されている。このころは北信の雄族高梨氏の支配下にあったとされている。戦国乱世の時代になると越後上杉氏と甲斐武田氏の争いに巻き込まれて、天文22年(1553)ころ上杉方の高梨氏は、越後に去ってこの地方は武田氏の支配地となった。

天正10年3月、武田勝頼は織田・徳川の連合軍に敗れ、この地方は一時織田氏の将の支配するところとなった。6月、織田信長が本能寺で倒れ、上杉景勝の支配地となった。この上杉氏も慶長3年(1598)会津に移封になり、家臣の高梨氏なども従った。

その後豊臣秀吉の蔵入地や、森忠政領となるが、同8年より松平忠輝（家康6男）領となった。慶長20年（元和元・1615）忠輝は沓野山（志賀高原）の巢鷹山15か所に11人の巢守衆をおいている。

その後領主が交替しても巢鷹山は継続し、元和8年松代藩真田氏になっても巢鷹山、巢守は継続した。しかし、いつの頃からか、巢守衆は8人に減り、貞享5年（1688）、藩では沓野山の巢守を廃止し、山見役、国境見回り役のみ、存続させている。

宝暦12年（1762）沓野組の住民は、藩に願って田中村から独立した。天保15年（1844）松代藩の佐久間象山は、佐野・田中・沓野の利用掛に任じられた。嘉永元年（1848）鉱物資源の探査を計画し、渋峠から上州草津に出て、入山・和光原・布池（野反池）から魚野川の溪谷を通り、秋山にて、野沢温泉を経て沓野に帰っている。この探査行は彼の『踏野日記』に詳しい。

明治4年（1871）廃藩置県が行われると、沓野は松代県から中野県となり、長野県となった。6年に地租改正条例が交付され、以後曲折があったが、これは「官民有区分」を伴うものであった。これまで林野は、共有意識により、慣行に基づいて入会する風習が強かった。

同7年、沓野・湯田中両村は田畑山野地券作成に際して、志賀高原の山林を公有地として、記載報告した。その後公有地は官有地に編入され、8年になって官有地として確定された。これでは生計の道が断たれたとして、10年（1877）民有地引戻しの出願をしたが、認められなかった。

12年になって、象山のあと利用掛になった、館三郎に依頼して民有地引戻しの運動を展開することになった。その後多くの経過を経て、13年、文六・竜王・志賀山方面の引戻しが成功し、19年（1886）には、岩菅山方面の民有地引戻しが実現した。これらの財産の管理団体として、昭和2年（1927）になって、「財団法人下高井郡平穏村和合会」、「同共益会」が設立されて今日に至っている。

志賀高原の麓にある沓野は、草津街道の宿場であり、山稼ぎの人の食料などの基地でもあった。「当村の儀は高山の麓、霧下の嵐強く、谷合薄地少高、不相応の人家多く、極難の儀は眼前に御座候処、御見聞の百姓一派にては恐れ乍ら住居相成り難く、困窮仕り外に余業もこれ無く、雪中深山牛馬通し無く、人足も難く、嶮岨の場所厭わず山稼ぎ専に仕り候儀は、（以下略）」（『和合会の歴史』から転載）と、明治の民有地引戻し運動の嘆願書の文書に述べられている。

このように沓野では田畑の耕作の外は、山稼ぎに大きくたよってきた、その主なものは、白箸製造、根曲がり竹採取、薪炭製造であった。

この山稼ぎ、草津通いの古い道は、沓野から遺跡近くの竜宮清水のほとりを通り、十二沢、波坂（なめっさか）を上って志賀に入った。この竜宮清水にはかつて茶屋があり、ワサビが栽培されたことがある。

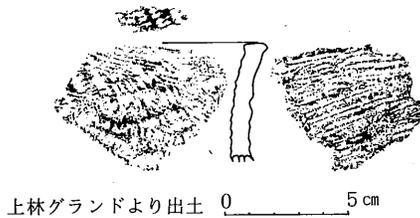
渋峠または草津峠を越えて（あちやとだんべの国ざかい）、群馬県草津町、六合村入山地方などの吾妻地方と、信州側沓野との交流は、古くからあり、近世以後盛んになった。浅間山の大噴火が原因とされる天明の飢饉では、吾妻郡の百姓衆が峠を越えて信州側の高値の米を買って帰って行く姿が、哀れであったと、書かれている文書も残っている。

昭和2年(1927)ころは、沓野から草津へは、卵、米、野菜(玉ネギなど)リンゴなどを運び、草津からは、まげもの(ヒシャク、めんぱ)、しゃもじ、硫黄などを持ち帰った。牛なら2頭、馬なら1頭で荷物を運搬し、売買も行った。運んだ品物は3~5倍で売れたといわれている。沓野でこの草津かよいをしていた人は、最盛期には20人は、いたといわれている。

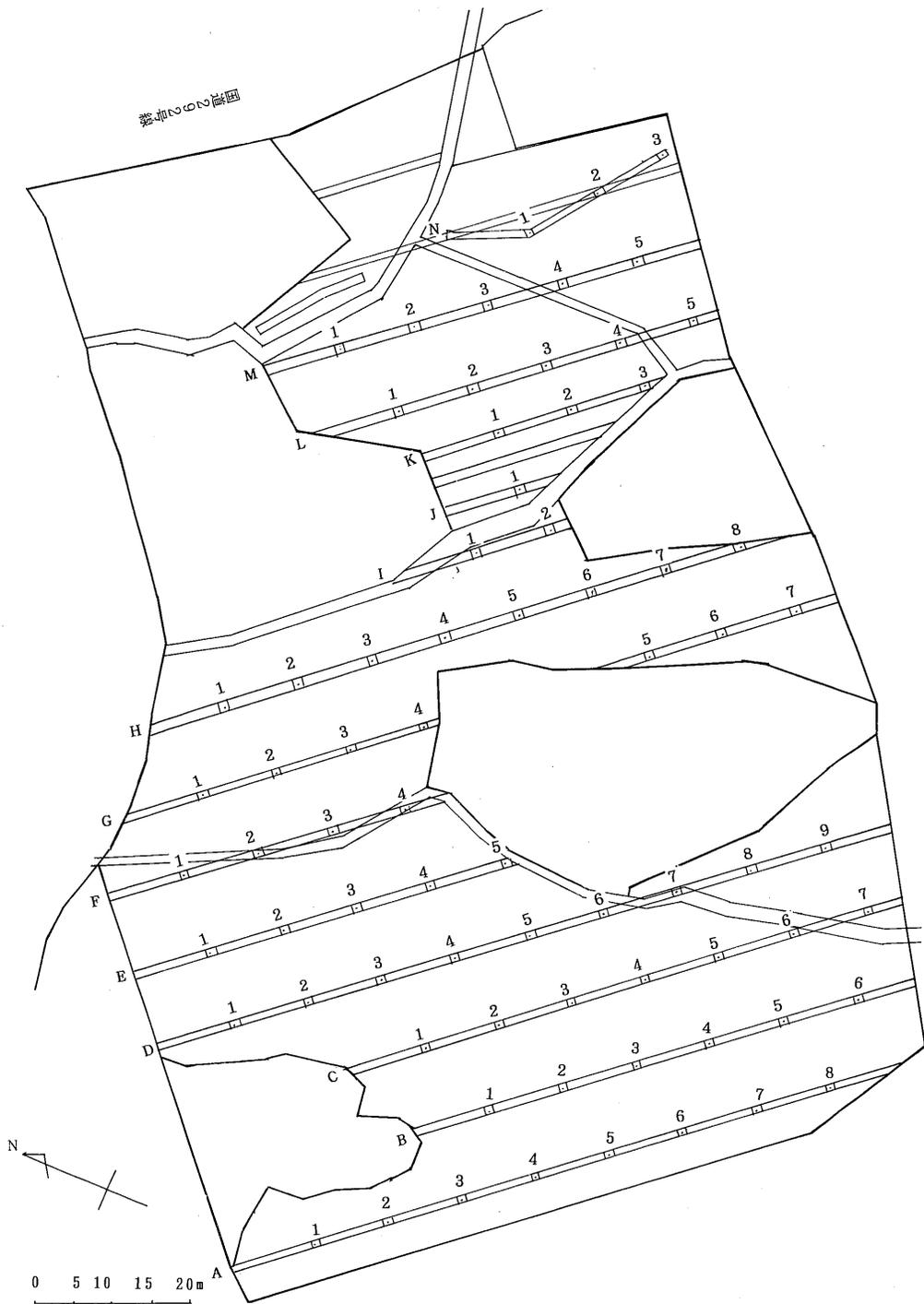
春の雪が解けてから、10月末までが荷運びの期間で、硯川で昼食を使い、午後3時ごろには草津に着いた。夏の夕立は草津の方が雨も激しく、雷鳴も大きかったという。ときには白根山の噴火にあうこともあり、馬の足がやけどした話も伝わっている。

六合村の入山地方の熊倉や元山へは、渋峠から芳ヶ平、または草津峠から草津を通らず行く道があり、カンジキのころは、見通しに行けて、近かったといわれている。昭和初期この地方は、広大な山野を利用した、馬の飼育が盛んで、沓野の人が中をとりもって、農繁期に、善光寺平の農家に、貸付けることも行われた。

このころまでは、吾妻溪谷の道路が未整備で、信州ルート of 最短距離の沓野の草津商人と呼ばれる人たちの活躍の場でもあった(『山ノ内町誌』『沓野民俗誌稿』)。



第3図 十二沢遺跡出土土器拓影図



第4図 遺跡の確認トレンチ設定図

第II章 発掘計画

1 開発計画と経過

上林中道南遺跡は、一級河川角間川と横湯川の侵蝕崖に挟まれた台地に所在しており、この地点は、1998年長野冬季オリンピック、アルペン競技開催会場の志賀高原への玄関口の重要な拠点でもあります。

冬期間にはスキーのメッカ、志賀高原を目指して、昼夜を問わず県内外から多数の車が往来し、なかには雪道に無防備な車、雪道に慣れていないドライバー等、しばしば交通渋滞を引き起こしているのが現状です。

これ等のことから、この国道292号線を管理する長野県中野建設事務所では交通安全対策のため、「上林チェーンベース」の建設計画をたて、山ノ内町に提示されました。

計画内容

上林中道南遺跡内 12,000㎡ (有効面積9,500㎡)

盛土量 35,000㎡ 盛土厚 2～5 m

用水路 つけ替え

チェーン着脱所 コンクリート舗装 (仕上げ厚さ20cm)

規模 鉄筋コンクリート平屋建、トイレ、大型車・小型車用

工期 平成6年暫定供用開始、平成8年供用開始

この計画区域に含まれる上林中道南遺跡は当町では縄文時代の重要な遺跡であることから、慎重に対処し、つぎのような協議を行いました。

平成6年10月22日(水)長野県教育委員会文化課埋蔵文化財係、百瀬・春日両指導主事、町文化財保護審議会委員金井汲次先生、中野建設事務所、課長外3名、町教育委員会事務局担当で協議を行い、金井委員から遺跡の概要説明があり、つづいて、中野建設事務所から上林チェーンベース建設の概要説明をうけ、県文化課の両指導主事の遺跡保護の指導があった。

その結果、(1)事業実施前に試掘調査を行う、(2)試掘調査の結果をみて、再協議を行う。

10月下旬、町教育委員会では調査団を構成し、11月10日から11月16日の間に試掘調査を実施した。この結果をふまえて11月21日(月)に第2回目の協議を行い、はじめに、発掘調査団長檀原長則から試掘調査結果についての詳細な資料と説明があり、上林中道南遺跡の今回の調査範囲の確定が報告された。つづいて、県文化課指導主事の指導があり、来春の雪解けを待って、1,700㎡の範囲の本遺跡発掘調査を実施し、記録保存終了後、事業の計画が実施されるよう指導を得た。

このため、今冬の一部チェーン着脱場のため、遺跡面にシートを敷き土砂を1 m以上覆って、造成を行い、来春雪解けをまって仮使用のチェーン着脱場の土砂をとり除いて、発掘調査に支障

のないよう配慮する。また遺跡面が破壊されないよう、重機の運行に注意するなど協議された。

2 調査団の構成

調査責任者	小布施竹男	山ノ内町教育委員会教育長
顧問	金井喜久一郎	山ノ内町文化財保護審議会会長
	金井汲次	日本考古学協会会員
		山ノ内町文化財保護審議会委員
団長	檀原長則	日本考古学協会会員
調査補助員	関 伊志雄	
	小林延秋	
	浦野 貢	
	竹節平助	
事務局	山ノ内町教育委員会事務局	
	岩下徳治	事務局長
	小林貞信	社会教育係長
	児玉雅人	社会教育係
	秋元 清	体育係
	宮崎弘之	体育係

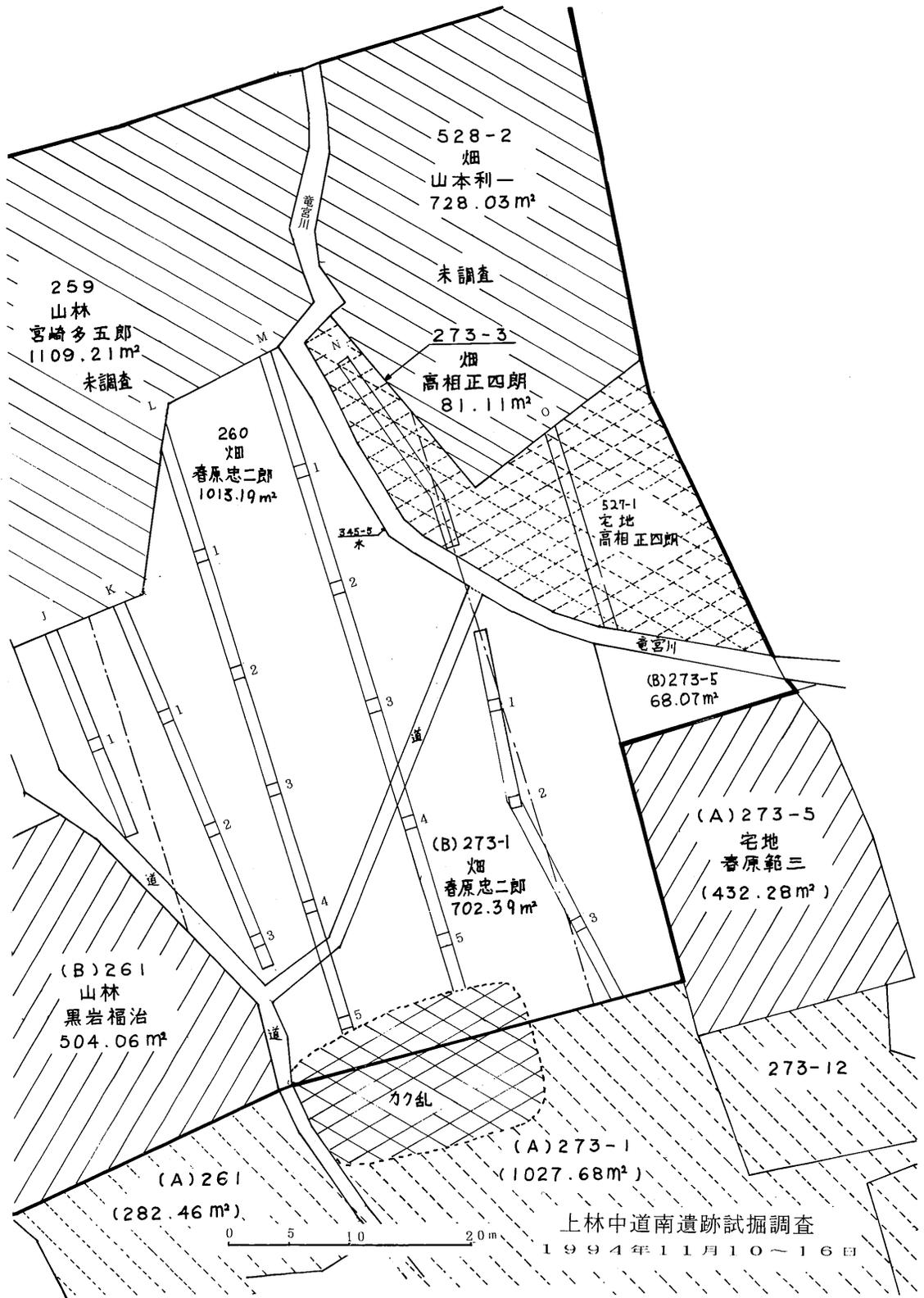
3 調査日誌

1996年

10月12日 「上林チェーンベース」建設に伴う、上林中道南遺跡の保護協議。出席者、県教委文化課百瀬・春日指導主事、中野建設事務所関係者4人、町文化財保護審議会委員金井汲次と町関係者の出席を得て行い、試掘調査の費用は建設事務所で負担し、試掘調査の結果をみて、つぎの調査を協議し、調査担当者に檀原があたることに決定した（1「開発計画と経過」参照）。

10月14日 先日の結果に基づき現地で、檀原と教委小林係長が中野建設事務所の事業担当者と、現地踏査と事業概況の説明をうけた。「上林チェーンベース」の完成盛土高さ2～5m、盛土容積35,000㎡、コンクリート舗装、融雪施設、屋内チェーン着脱場などを平成7年度、建設する予定になっている。この計画地の一部に本年度のスキーシーズンに間に合わせるため、一部を造成して仮使用したいとの内容であった。

現地踏査の結果、一部地権者の同意を得ていない山林もあるが、10m間隔に幅1mのトレンチを設定し、総延長約800mを大型重機を使用して行い、これらに基づいて調査費用を積算することなど決定し、主に杉などの立木を11月10日までに、伐採、搬出する日程で、試掘調査は引き続いて行うことに決定した。



第5図 遺物確認範囲実測図

この日、踏査の結果、庭木移植のため攪乱された場所より、縄文早期の押型文土器片、石斧破片、前期土器片、平安時代の土器片など12点が表面採集された。

11月10日 現場作業用テント設営。Aトレンチから試掘調査開始、杉の枝などを片付けて、杉株を抜根しながら行う。黒ボク土（この地方では、ノボ土）の堆積が、浅いところと深いところがあり、大石の転石がみられた。Aトレンチ北で、下層の堆積層まで掘り下げる。ABC3本のトレンチを完掘した。10mおいて土層の記録、写真撮影を行った。

11月11日 本日はDEFGトレンチの試掘を行う。Dトレンチ中央は矢塚があって、南側にかけて石が多かった。石の少ないところは、戦中戦後の食料難の時に開墾されて、馬鈴薯などが、栽培されたといわれている。Gトレンチ5～7は、黒色土層1mに達したが、遺物は発見できなかった。Dトレンチ1で、磨石の破片が出土した。

11月12日 Hトレンチ1の角間ダム予定地のボーリングコア置場の建物跡付近は黒色土層が1m50cmと深かった。重機の退去ルートの関係で、東方のOトレンチに移った。ここは竜宮川のほとりで、いままで住宅があった所である。その基礎工事の時、時期不明の土器が、出土したといわれている。

宅地跡は基礎工事で地山まで、破壊、攪乱されていた。調査の結果、竜宮川はもと6～7mと川幅が広く、人工的に狭められて、1～3mの厚さで、埋められていることが分かった。

Nトレンチでは土器が出土したので、この出土面で、掘り下げを中止し、10mおいて1㎡の調査坑を掘って、下層の状態を調べた。このトレンチでは、南（傾斜の上）に多くの土器の出土があった。

11月14日 Mトレンチ4・5土器片多数出土。黒色土層（黒ボク土）30cmから1mの堆積あり、ここに平安時代の土器から、縄文土器が包含されている。層位と出土位置の把握が必要である。Lトレンチは調査未完了。Mトレンチの北、竜宮川のところは、黒色土に湧水があった。

11月15日 まわりの山は雪となる。Kトレンチ南は石礫多数、Lトレンチ4黒色土層の上から40cmに縄文中期土器、80cmに山形押型文土器、以下10cm黒色土、褐色土（漸移層）10cm以下黄色土層（地山）となっている。Lトレンチ5の表面から75cm下から山形押型文土器出土、以下褐色土の漸移層となり、床面（生活面）の感触もあった。

重機でAトレンチから埋め戻しを行う。

11月16日 Oトレンチまで来春の調査に備えて埋め戻しを行う。土器洗いと調査用テントの収納を行う。

以後、整理作業を町社会体育館で行い、21日には、山ノ内役場で関係者が集まって、別項のような遺跡の保護協議を行った。さらに報告書の作成を前記の社会体育館で行った。

表1 試掘調査遺物出土表（1994年11月10～16日）

トレンチ 番 号	出土遺物（推定を含む）						
	縄文早期土器片	前期土器片	中期土器片	平安時代土師器片	石器片	遺物合計	備 考
A							
B							
C							
D					1	1	磨石破片
E							
F							
G							
H							
I				1		1	
J	1					1	
K	2					2	
L	5	5	1	7	2	20	
M	4			2		6	
N	38	4		1		43	
O							
LM南 カクラン	6	4		5	1	16	
合 計	56	13	1	16	4	90	小片も含む

表2 出土土器分類表（確定値）

縄文時代										平安時代		その他	合計
早 期					前 期				中 期	後 期			
種別	押型文系	条痕文系	縄文系	無文	竹管文系	撚糸文系	縄文系	無文	隆帯文	()黒色土器			
数量	9	17	4		2	1	4	3	1	14(4)	31	86	

4 土層状況

山ノ内盆地の地形面は、高位より佐野面、湯田中面、夜間瀬川氾濫原となっている（『山ノ内町誌』）。上林中道南遺跡の立地はこの佐野面にあり、佐野面は横湯川・角間川・夜間瀬川とその支流の河川によってできた、複合扇状地の砂礫層堆積段丘である。このうち遺跡は主に角間川の影響をうけているが、遺跡付近では崖錐堆積物の亜角礫～角礫がみられ、この大石の間より竜宮川の湧水が多量に噴出している。

段丘崖の基部は基盤岩（ひん岩、温泉源の岩）で露出している箇所もある。遺跡南方の角間川の河床から佐野（遺跡）面までの高さは、約50mで、面を構成する礫層は、ところどころ細砂または、粘土をはさんでおり、礫は主にひん岩、黒色緻密な安山岩で亜角礫、亜円礫である。この礫は大きいもので1m前後に達し、ことに遺跡地周辺には多くみられ、これが耕地化されない原因でもあった。

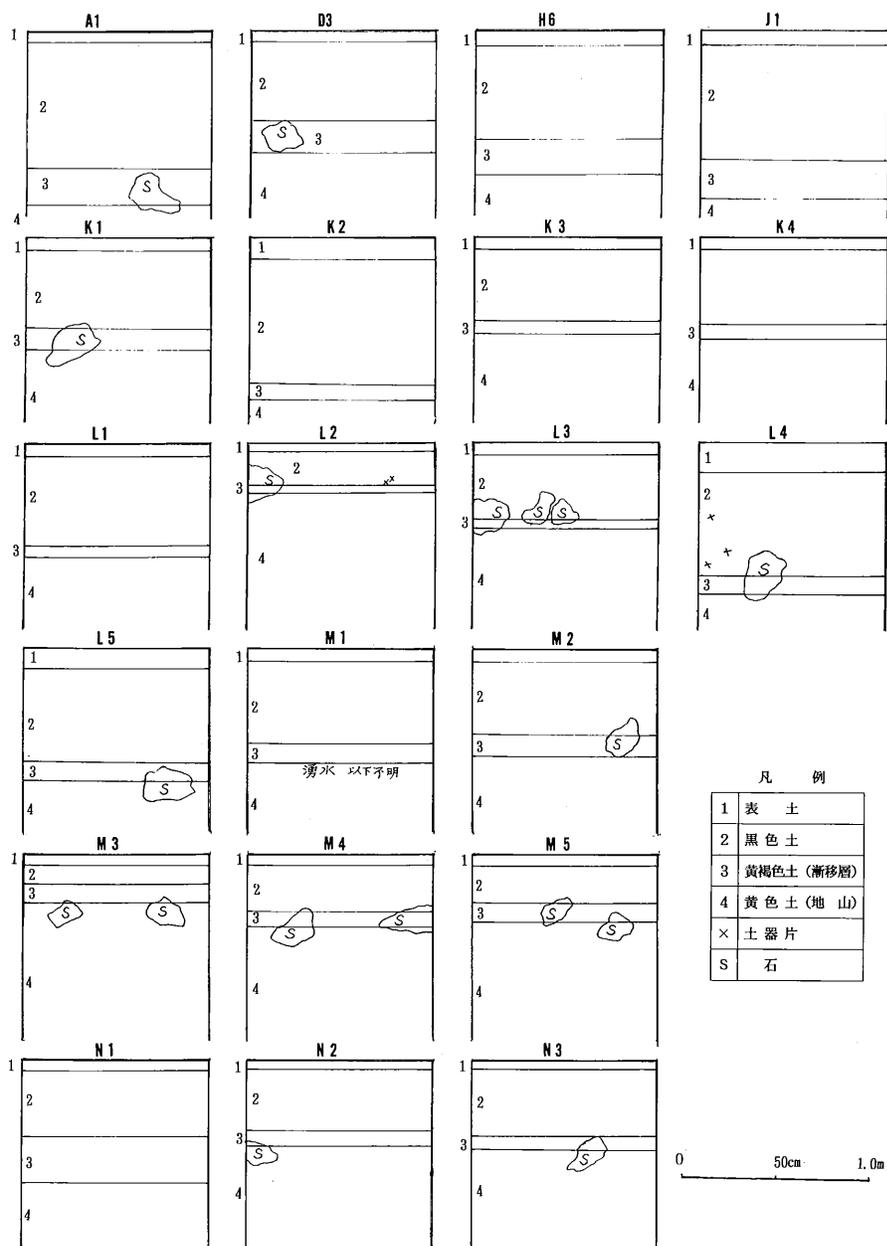
今回の調査地のAトレンチ1では、地表下約1.8mを掘って断面を調査した(写真1・図A1)。それによると、表土(第1層)と黒色土(黒ボク土・第2層)が90cmを測り、20cmが黄褐色土の漸移層(第3層)で、以下黄色土層(第4層)で、その下層は調査できなかった。

この黄色土層には、角礫が多く含まれ、旧山ノ内盆地の面上で、この上層には、角のとれた1mの石が散在し、中には集中している地点もあり、その間に黒色土の1m以上厚く堆積した地点もあった。遺物検出地点のJ~Oトレンチでは、一部に矢塚がみられるが、近年まで畑であって、石の点在は少なかった。

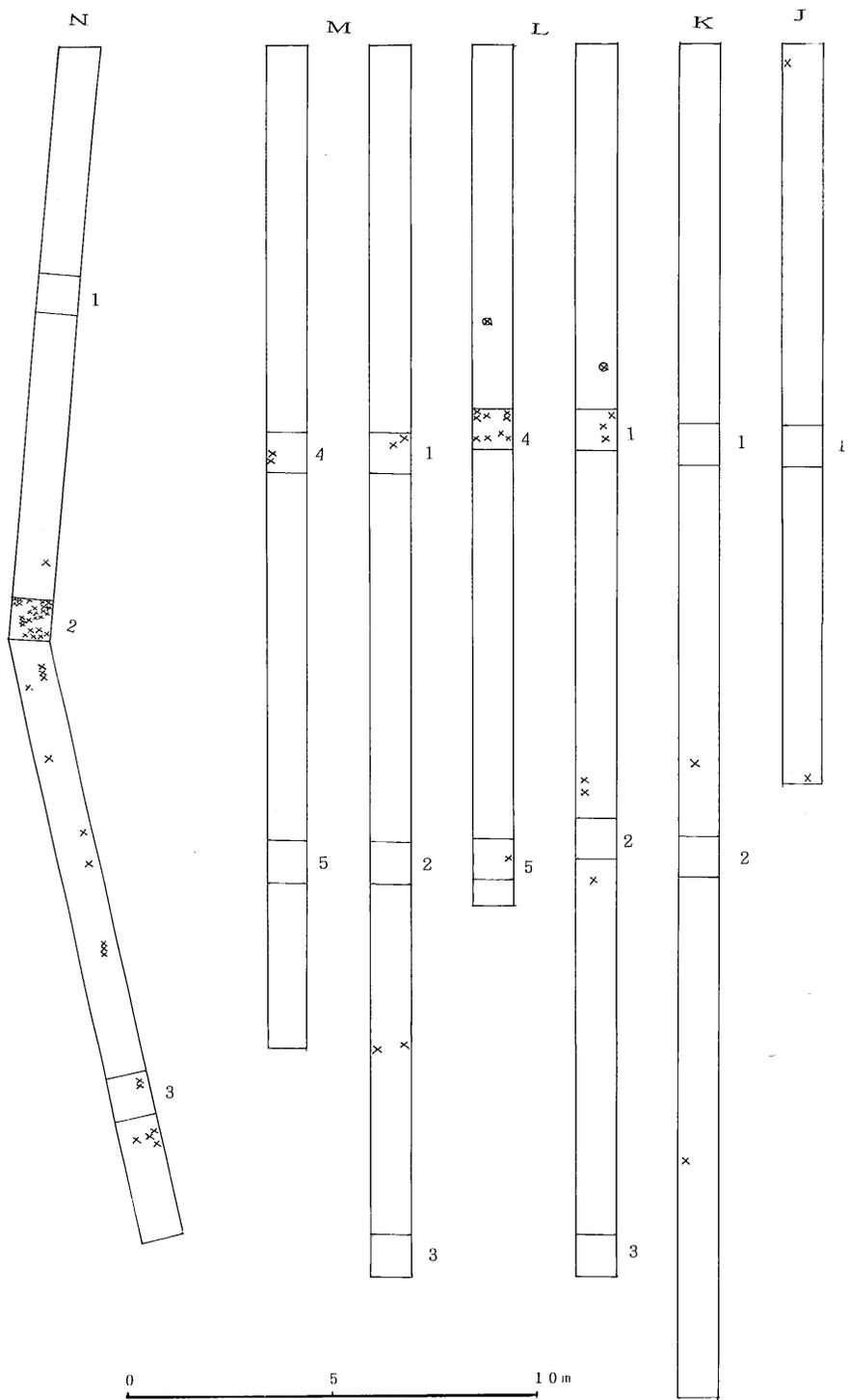
この洪積台地の佐野面(遺跡面)には、乾燥期には微粒となって舞い上がる黒ボク土が堆積し、山ノ内町では、高社山麓などにも分布し、縄文草創期~早期の人類の活動の舞台となっている。この黒ボク土の大半は、最終氷期(一部完新世)に降灰したローム化火山灰層を母材とし、完新世の降灰静穏期ないし休止期に、草木植生下で腐植が集積して生成した土壌である。したがってその分布は、最終氷期に降灰したローム化火山灰層の分布をほぼ示している。この黒ボク土の腐植層を生成した植生は、炭素含量とプラントオパール(植物珪酸体)含量との正の相関関係からプラントオパールに富むススキ、ササなどのイネ科の草本植物とみられる。

黒ボク土の腐植層基底部の14C年代は6,000YBP前後を示す場合が多い。したがって、黒ボク土の分布は、後氷期における気候的極相である森林が、森林伐採、焼畑、野火のような人為により遷移したススキ、ササ等の草原の分布を指示している。またこの部位における広域テフラ(アカホヤ火山灰-6,000YBP)の存在はこの時期を示す鍵層となる(『日本第四紀地図解説』松井健『土壌』1987)。

このように前にもふれたように、この遺跡の遺物包含層はこの黒ボク土中にあり、出土遺物の層位的把握が肝要である。



第 6 図 トレンチ地層断面実測図



第7図 発掘予定地の土器検出状況

第三章 遺物

1 縄文時代

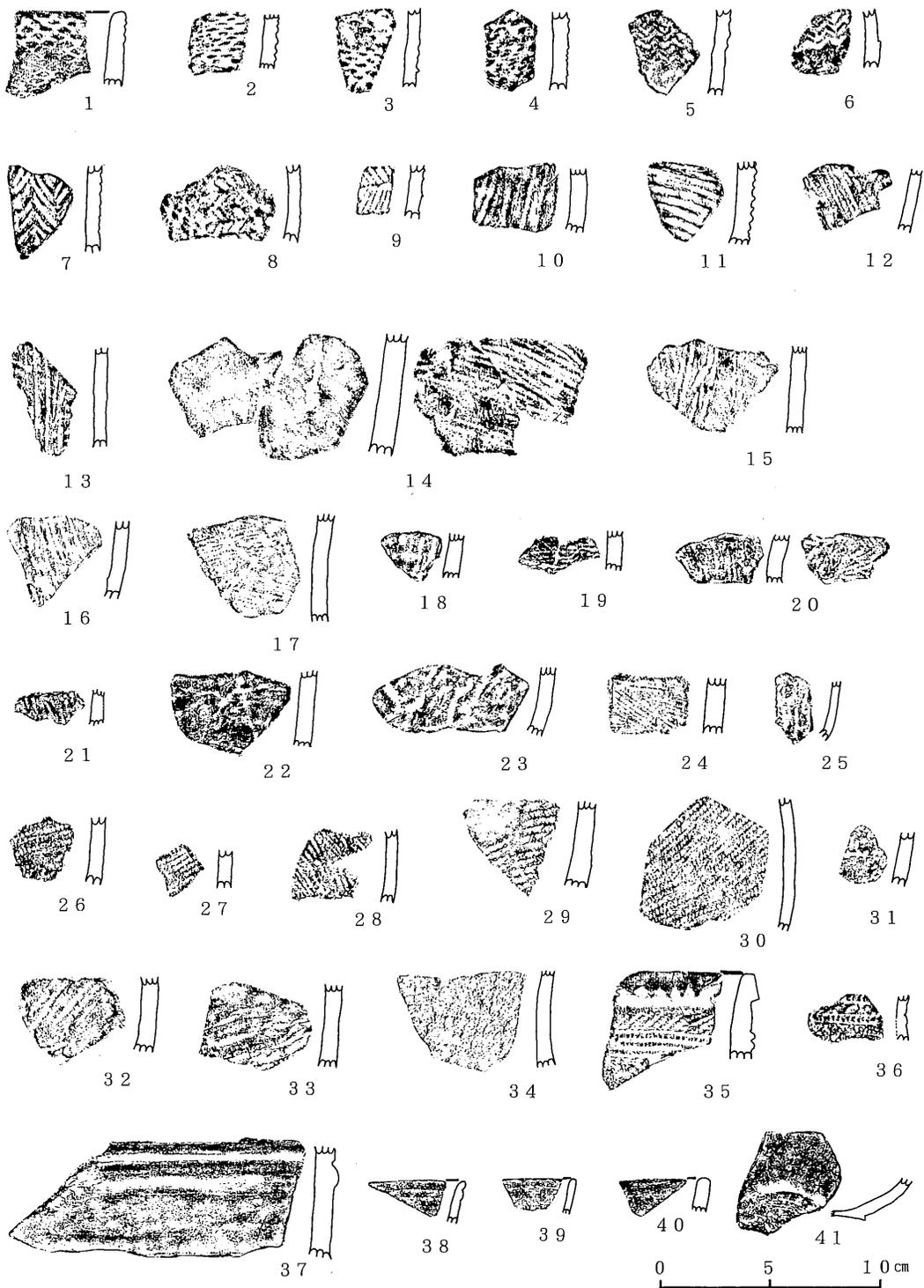
(1) 早期押型文系土器

今回の調査では、押型文のみられる土器が8片検出された。そのほかの土器も含めて、器形の全容の判明する土器片は存在しない。押型文の施文具は、細く短い木の円棒に刻みを入れて、土器面を回転施文したと考えられている。このうちA種楕円押型文の土器は4片で、胎土に繊維痕が少量みられ、器厚は7mm前後である。このうち(8図4)は赤褐色の土器で、上方に大きな楕円文があり、その下の楕円文は、半分に切られたような、小さな長楕円形を呈している。これは楕円文の中央に平行に突き刺したようにもみえるが、よく観察すると、中には中心が凹んだものが存在する。したがって地文に沈線文があつて、この上に楕円文が施文されたと考えたい。このような施文の類似する土器片は、早期細久保式に編年されている上水内郡信濃町塞の神遺跡から発見されている(笹沢浩・小林孚「長野県上水内郡信濃町塞の神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18-4 1966)。下高井郡木島平村三枚原遺跡(高橋桂他『三枚原遺跡』木島平教委 1977)や、陣の岩岩陰遺跡(丸山敏一郎「長野県菅平陣の岩岩陰遺跡調査該報」『信濃』20-5 1968)などからも類似のものが発見されている。

早期の遺跡で普遍的にみられるB種山形文の土器(8図5・6)は2片で、全面施文でなく、岡谷市の樋沢式のような帯状施文と思われる。(6)は施文回転するとき強く印刻されて、施文端部が凹んでいる。(7)は複合山形文の土器で、この土器では復原できないが、4cmくらいの長さの螺旋状の刻みを入れた、施文原体が使用されたと推定される。これと同種の土器は更級郡大岡村の鍋久保遺跡から検出されている(森島稔他「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24 1976)。これは細久保式の前半くらいの時期に比定されている。(8)は縦方向の楕円文と、横方向の木枝状の変形押型文の組み合わせの施文のみられるもので、この文様と原体が異なるが、(9)と同種である。胎土には石英粒が顕著に認められる。(9)も(8)にみられる変形押型文の土器で、施文原体の長さは、印刻端部の状態から2.6cmくらいと推定している。

以上の(7、8、9)の土器は、東北地方に分布の主体がある、日計式の押型文土器の出土する遺跡に伴出する土器と文様が類似している。桑月鮮は更埴市池尻遺跡、信濃町塞の神遺跡出土の押型文土器を指摘している(桑月鮮「東北地方の押型文土器」『長野県考古学会誌』47 1981)。

この日計式土器は東北地方を中心に分布し、貝殻沈線文系土器群に先行する早期前葉の押型文系土器群の一つで、最初、青森県で表面採集された土器が目され、1957年の江坂輝弥らによる同日日計遺跡の調査によって存在が明らかとなった。1964年岩手県蛇王洞洞穴の調査で、当該資料が貝殻文沈線文土器群の下層から出土したことにより、早期前葉の位置づけが確定した。



第8图 土器拓影图(1)

表3 土器観察表(1)

番号	出土位置	層位	時代	時期	系統	種別	胎土	焼成	色調	備考
1	LM南表採	—	縄文時代	早期	押型文	楕円文	繊維痕	堅い	淡黄褐色	
2	N3	II	〃	〃	〃	〃	〃	やや軟	褐色	
3	LM南表採	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	明燈色	
4	M4	II	〃	〃	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
5	L2	〃	〃	〃	〃	山形文	〃	〃	明燈色	
6	N2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	暗黄色	
7	L4	〃	〃	〃	〃	複合山形文	〃	〃	〃	
8	K3	〃	〃	〃	〃	楕円文 複合山形文	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃	〃	〃	複合山形文	〃	〃	赤黄褐色	
10	N2	〃	〃	〃	条痕文		〃	堅い	暗燈色	
11	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	
12	L3	〃	〃	〃	〃		〃	〃	暗褐色	
13	N2	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	
14	N3	〃	〃	〃	〃		〃	やや軟	黄燈色	内面にも条痕
15	N2	〃	〃	〃	〃		〃	堅い	暗褐色	
16	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	黄褐色	
17	〃	〃	〃	〃	〃		〃石英粒多い	〃	暗褐色	
18	〃	〃	〃	〃	〃		〃	やや軟	暗赤褐色	
19	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	17と同体
20	LM南表採	〃	〃	〃	〃		〃	〃	暗黄色	内面にも条痕
21	N2	〃	〃	〃	〃		〃	堅い	〃	
22	〃	〃	〃	〃	〃		〃石英粒多い	〃	暗赤褐色	
23	〃	〃	〃	〃	〃		〃	やや軟	黄褐色	
24	〃	〃	〃	〃	〃		〃石英粒多い	堅い	暗赤褐色	
25	L2	〃	〃	〃	縄文		—	〃	暗黄色	
26	J1	〃	〃	〃	〃		繊維痕	〃	暗褐色	
27	L4	〃	〃	〃	〃		—	〃	暗黄褐色	
28	N3	〃	〃	〃	〃		—	〃	暗褐色	
29	LM南表採	〃	〃	前期	〃		—	〃	赤褐色	
30	L4	〃	〃	〃	〃		—	〃	黄褐色	

日計式の施文原体は、長さが3～4cmくらいであり、原体の両端は平坦に切断されているのが特徴である。器形は砲弾型の尖底で、胎土には砂粒とともに繊維を混和材として使用している。

日計式土器の文様は、1. 重層（複合）山形文、重層菱形文の押型文および縄文を地文として、口縁部に横位の平行沈線を数条めぐらすもの、2. 上記の押型文を地文として、平行沈線が平行線状の押型文に置き代わるもの、3. V字状・X字状の単位を平行線で充填した押型文、4. 多段菱形文をはじめとする多様な押型文に菱形・三角・目の字状などの充填文様のみられるものなどがある。この土器の終末が示すように日計式の分布は、後続する貝殻文沈線文系土器群の分布と重複する。現在、太平洋側では千葉県まで、日本海側では新潟県までその出土が確認されている（石川恵美子「日計式土器」『縄文時代研究事典』1994）。

このように日計式に類似する土器は、先にみたように長野県内にも出土しており、この地方で自生したものか、または他の押型文分布圏の影響か、東北地方の当該期文化の影響下にあるのか、(8)の施文にみられるような、一つの土器にみられる、文様の組み合わせなどによって、地理的には、新潟県に近い本遺跡の当該期の早期押型文土器文化への影響、編年の位置づけが今後の調査によって、明らかになることが期待される。

(2) 早期条痕文系土器

つぎの時期に編年されているのは、(8図10～20、22～24)の貝殻条痕文土器群である。この貝殻条痕文系土器には、関東では初頭に子母口式土器(標式遺跡川崎市子母口貝塚)、つづいて野島式(同横浜市野島貝塚)、鶴ヶ島台式(同三浦市鶴ヶ島台遺跡)、後半に位置する茅山下層式(同三浦市茅山貝塚)、茅山上層式(同)などがある。北信地方もこれらの土器群の影響下にあり、別に掲げた(3図)の十二沢遺跡のテニスコート造成地より、表面採集された土器片が子母口式土器で、口縁部に絡条体圧痕文が密に施文され、器面がなでられている。口唇にも押捺され、内面には条痕が鮮やかである。

子母口式、野島式、鶴ヶ島台式土器は、本遺跡の1984年(昭和59年)の圃場整備に伴う緊急発掘で検出した(山ノ内町教委『上林中道南遺跡』1985)。このとき多く出土したのは、鶴ヶ島台式土器で、野島式、子母口式や、山形を带状施文した押型文の樋沢式などが出土している。

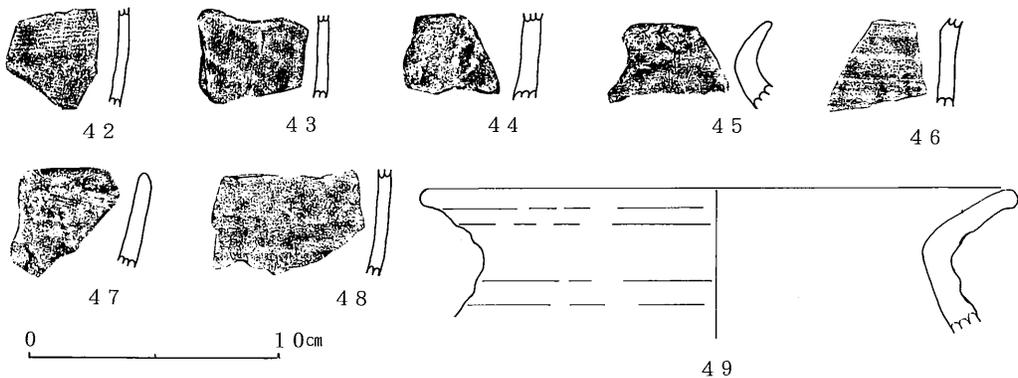
今回出土した条痕文系土器には、大別してA種(11)の貝殻腹縁による条痕の太く深いもの、B種(10・12～16・18・20・23)などの条痕が荒く、浅く荒い板状の工具で、器面を施文調整したとみられるもの、C種(17・19・22・24)のような細い条痕のみられるもの、などがあり、口縁部文様帯の土器片が未検出で、即断できないが、A種とB種は茅山下層式平行、C種は茅山上層式平行で、本県の男女倉C2式に類似しており、胎土に石英粒と繊維痕が顕著である。

(3) 撚糸文の土器

軸に撚紐を巻き絡めて作った原体(絡条体)を回転して施文した文様を撚糸文とよんでいる。今回の調査で3点出土している。(21)は小さい破片のため、確定できないが、縦位に撚糸文が施文されている。早期前半の土器の可能性がある。(34)は胎土に繊維痕が少量みられる焼成が堅緻な

表4 土器観察表(2)

番号	出土位置	層位	時代	時期	系統	種別	胎土	焼成	色調	備考
31	L3	II	縄文時代	前期	縄文			堅い	赤褐色	
32	N2	"	"	"	"			やや軟	暗黄色	
33	LM南表採	-	"	"	"			"	"	
34	L3	II	"	"	撚糸文		繊維痕少	堅い	暗赤褐色	
35	N3	"	"	"	縄文			"	"	三角沈刻文 刻み
36	LM南表採	-	"	"	"			"	"	竹管文
37	L4	II	"	中期	竹管文			"	赤褐色	
38	LM南表採	-	平安時代	後期	黒色土器	(椀)		"	黒色(内外)	
39	"	-	"	"	"	"		"	白黄色	内黒色
40	"	-	"	"	土師器	"		"	赤褐色	
41	L2	II	"	"	"	"		"	"	
42	"	"	"	"	"	"		"	"	
43	L4	"	"	"	"	"		"	暗褐色	
44	N2	"	縄文時代	前期?	無文			やや軟	白灰色	
45	LM南表採	-	"	"	"			"	暗灰色	
46	"	-	平安時代	後期	土器師	(甕)		堅い	赤褐色	
47	L4	II	"	"	"	"		"	"	
48	LM南表採	-	"	"	"	"		"	暗褐色	
49	J北端表採	-	"	"	"	"		"	黄褐色	



第9図 土器拓影図(2)・実測図

土器で、無節の縄をやや不規則に軸に巻いて、連続圧痕した文様である。土器の観察と施文から関東地方の前期前半のはじめに位置づけられている。花積下層式（標式遺跡埼玉県春日部市花積貝塚）に平行する土器と考えたい。

(33)は胎土焼成が黄褐色を呈する土器で、繊維痕は観察されない。無節の縄を間をおいて巻き付け、横方向に施文している。前期中葉から中期の土器と思われる。

(4) 縄文の土器

ここでは縄（撚紐）を回転して施文した、斜行縄文の土器をふくめた。この縄文の土器は8片発見されている。小さい破片のため、他の文様と組合わされる可能性が多く残されている事を考慮したい。このうち、A群 早期に位置づけられるのは、(25~28・31)である。(25)は器厚が0.4~0.5cmと薄く、尖底土器の底部付近の破片と推定される。(26~28・31)は器厚が0.6~0.7cmで繊維痕があり、単節縄文が施文された土器である。

B群 前期に属すると思われる土器である。(30)に観察される縄文は、3条目が深く押捺されている。器厚が0.6cm前後で繊維痕は無く、白色の砂粒の顕著にみられる土器である。(32)の土器も同様である。(29)の土器も前期の範疇に属する土器である。

(5) 竹管文の土器

半截竹管文のみられる土器で、(36)は器厚が0.5cmで、地文に単節縄文を施文し、器面のカーブの転換点に、2条の竹管C字文の押し引きがされている。早期末~前期前葉の土器と考えられる。

(35)は胎土に白色の砂粒がみられる土器で、口縁部を肥厚させ、外面下を連続三角形に削り取っている。下は単節縄文を地文として、半截竹管を3条同時に引き、上にへら状工具で刻みをいれたようにみえる。しかし3連の半截竹管による、D字状の押し引きをして、その後同じところを平行に引いたものと推察される。それは上から3本目のD字が潰されていることから判断される。このような三角の印刻を伴う土器は、『長野県史考古資料編』では前期VII期に編年されている土器群で、新潟県鍋屋町遺跡出土土器を標式とした土器に、多く用いられる文様である。

(37)は器厚1cm前後の堅緻な赤褐色を呈する土器で、半截竹管状工具による隆帯と、低い竹管文が接してみられ、上に加飾されていない。下に3cmの無文帯があり、半截竹管文の痕跡が看取される。このように文様に乏しく、所属形式と、時期の判断が難しいが、強いて言えば、このような施文を多用する、前期中葉の北陸系文化圏に属する仮称深沢式（標式遺跡飯山市 深沢遺跡）の土器と推定される。

(6) その他の土器

その他、提示した土器で、縄文時代に属すると思われる土器は、(9 図43~45)である。(43)は器厚0.5cmの薄い繊維痕のみられる無文の土器である。(44)は白灰色を呈する焼成が軟調の土器で、文様はみられない。(45)は口縁部の破片で、口唇部が尖りぎみの器形を呈し、文様はみられない。後期に属するかとも思われるが、確定は困難である。

(7) 石器

A 打製石斧 (9図3) 黒色緻密な安山岩の円礫を打ち欠いて、製作した撥形の打製石斧である。片面には加工痕がなく、片面調整である。縄文早期末葉に属する、木や骨の加工斧と見られ、先端に使用痕がある。

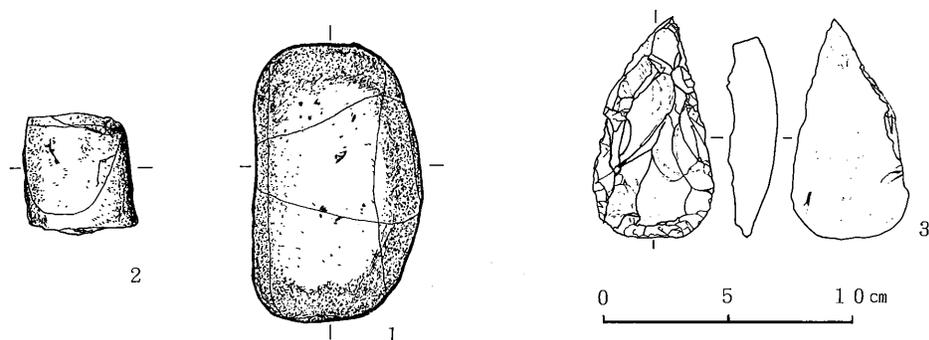
B その他 磨石(2)の破片と、敲(叩)石(1)、黒燐石の剥片が検出されている。

2 平安時代

(1) 土器

平安時代に属すると思われる土器は、(8図38~41)(9図42・46~49)である。(38)は碗の口縁部破片で黒色土器である。(39)も同様である。(40)も口縁部破片で、大形の碗または鉢と、推定される赤褐色の土器である。(41)は糸切り痕のみられる坏の破片である。(9図42・46・48)は甕の破片で、ロクロ成型されている。(47)は鉢の口縁部破片である。

これらの土器は小さな破片が多く、器形も明らかでなく、須恵器や灰釉陶器などの伴出もみられず、時期の同定が難しいが、総じて、平安時代の後半以降の所産と推定される。



第10図 石器実測図

第IV章 ま と め

1 遺物からみた遺跡の性格

今回の僅かな期間の調査によって、縄文時代早期から中期までと、平安時代の遺物が検出された。これは人類の生活の痕跡を示すもので、それはその時代の自然環境と、地理的環境に影響される面が大きいと思われる。縄文早期は人口も希薄で、生活領域が広がった。これは関東の貝塚遺跡で発見される土器と、ほとんど同じものがこの遺跡から発見されることが示している。縄文時代の主な食料獲得に必要な狩猟や、漁労、植物採集には、今も人跡未踏の地が残されている上信越につらなる、広大な山々が遺跡の背景にある。この入口を占めるこの遺跡は、第I章でみたように、豊富な湧き水に恵まれ、群馬県の利根川上流地帯とは、1～2日で往復が可能で、文化の交流に必要な、けものみちに由来する、国道292号線の源流の存在も考慮される。

正しくは発掘調査を経なければ判らないが、時期別に多くに分類される土器の在り方からみれば、長い間の定住生活でなく、移動や食料獲得の基地のキャンプ地的な性格が強いのではあるまいかと推定される。

遺跡数の限られた早期に属する、この遺跡は当該期のこの地方の様相を知ることのできる重要な遺跡の一つであり、正式な発掘調査に期待がかかっている。

かつて縄文時代には山間に住んでいた人達は、弥生時代の稲作の開始とともに、水田適地の沖積地帯に移り、開拓はそこより山間地に向かって進んでいった。この上林中道南遺跡に人がみられるのは、平安時代になってからで、その末期には金倉の弥勒石仏の遺物が残され、山ノ内盆地の東部も、牧場から次第に適地を選んで、耕地化されて行ったと思われる。

しかしこの遺跡は平坦地の遺跡と性格が違い、周囲には水田適地を持たない環境に、遺跡が立地している。さらに分布する黒ボク土は酸性がつよく、地力が低く継続して耕作するには、堆肥などの有機物の施用が必要といわれている。焼畑農耕と同じく2～3年が限度である。このような条件では、短期間の住居とならざるを得ないとみられる。

群馬県六合村の熊倉遺跡は白根山の麓にあって、成立は9世紀後半とされている(六合村教委『熊倉遺跡—山棲み集落の探究—』1984 能登健「白根山麓・山棲み集落の考古学的調査」)。ここで発掘された住居址の所見からは、遺跡の存続期間は短く、白根火山灰層に埋もれて消滅している。これは律令体制下の収奪をのがれた民の存在か、山の資源を求める民の存在か、一時的な耕作民か、観点の分かれるところである。

いずれにせよ、この上林中道南遺跡の平安時代の遺物からは、一時的な住居に残されたものと思われる。このように縄文時代と、平安時代の遺跡が複合するのは、先の白根山麓の遺跡でも指摘されており、山ノ内町でも須賀川盆地の遺跡などとともに、本遺跡も同様である。

2 今後の調査計画について

先に述べたようにこの遺跡は、黒ボク土に覆われており、この主成分の火山灰は、おもに妙高・白根・浅間などの火山から供給されたとみられる。このうち妙高赤倉テフラ（火山灰と火砕流）は、妙高山の中央火口丘形成期のもので、直下に縄文早期末～前期の遺物がある（早津賢二『妙高火山群—その性質と活動史—』1985）と、報告されている。このようにこの降下テフラをはじめ、前期の諸火山の降下テフラが、山ノ内町の山間地に堆積している。

この黒ボク土の植物基底層の14C年代は、6,000年前後を示す場合が多いとされ、同時期の広域テフラ（南九州のアカホヤ火山灰）が鍵層となるとされている。

このように6,000年前以降の黒ボク土の堆積と、下層の褐色土層に含まれる遺物には、相対年代に差があり、この層準における遺物（土器）、遺構の把握が重要となる。試掘調査結果ではこれらの土層が1 m近い地点があり、層位学的な確認が必要である。

このようにこの遺跡では、大型重機による表土（耕作土）の除去は、約10cmにとどめて、以下は手作業に頼ることが適当と思われる。これは黒色土層に遺構の存在が考えられるため、綿密な検出が要求されるためである。

以上、発掘調査の順序方法などは省いて、配慮すべきことを記した。

引用・参考文献

- 笹沢浩・小林孚 「長野県上水内郡信濃町塞の神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18-4 1966
- 丸山徹一郎 「長野県菅平陣の岩陰遺跡調査該報」『信濃』20-5 1968
- 山ノ内町誌刊行会 『山ノ内町誌』1973
- 和合会 『和合会の歴史—志賀高原の歴史—』1975
- 森島稔他 「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24 1976
- 木島平教委 『三枚原遺跡』高橋桂他 1977
- 長野県史刊行会 『長野県下高井郡山ノ内町沓野民俗誌稿』1981
- 桑月 鮮 「東北地方の押型文土器」『長野県考古学会誌』47 1981
- 山ノ内町教委 『上林中道南遺跡』1984
- 群馬県六合村教委 『熊倉遺跡—山棲み集落の探求—』
- 早津賢二 『妙高火山群—その性質と活動史—』1985
- 日本第四紀学会 『日本第四紀地図』1987
- 長野県史刊行会 『長野県史考古資料編（四）遺構・遺物』1988
- 戸沢充則編 『縄文時代研究事典』1994

写真図版

→1 西方から
遺跡を望む



←2 北方から
遺跡を望む

→3 源泉近く
の竜宮川





↑ 4 Aトレンチ1の土層断面



↑ 5 Bトレンチ4の土層断面



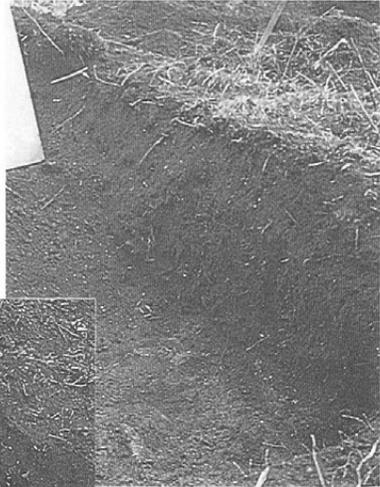
← 6 Cトレンチ1の土層断面

↓ 7 Bトレンチの調査風景

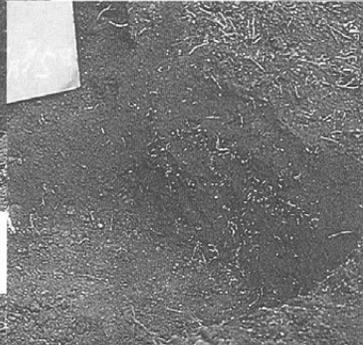




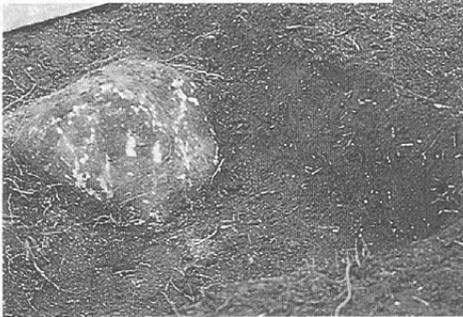
←8 Kトレンチ3
の土層と土器片



↑9 Kトレンチ4の土層
断面



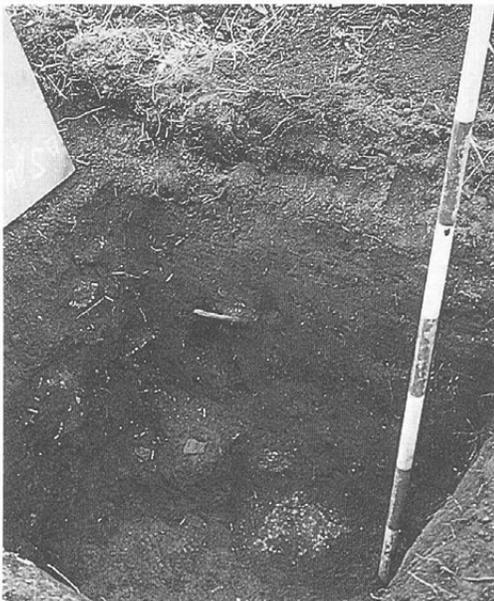
↓10 Lトレンチ2の土層断面



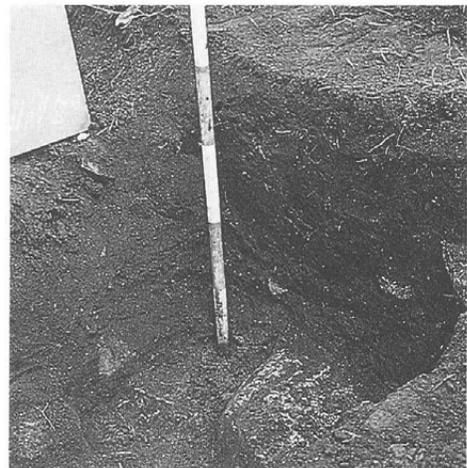
↑11 Lトレンチ
1の土層断面



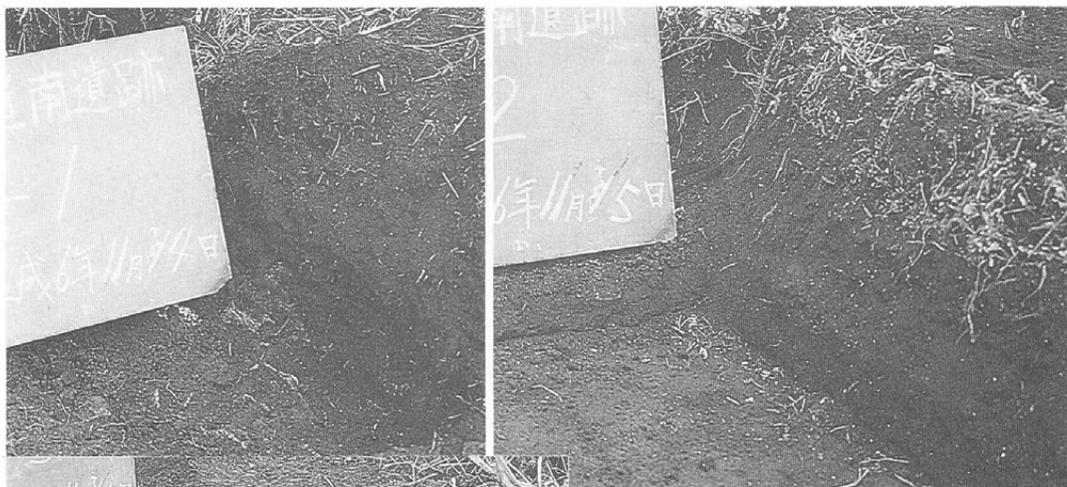
↑12 Lトレンチ3の土層断面



↑13 Lトレンチ4の土層断面と土器片
(上・中期土器、下・早期土器)



↑14 Lトレンチ5の土層断面



↑15 Nトレンチ1の土層断面

↑16 Nトレンチ2の土層断面



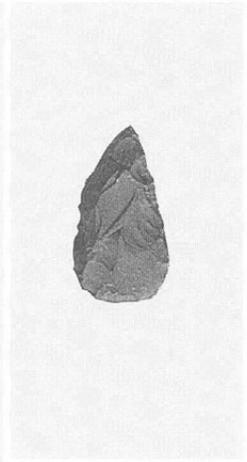
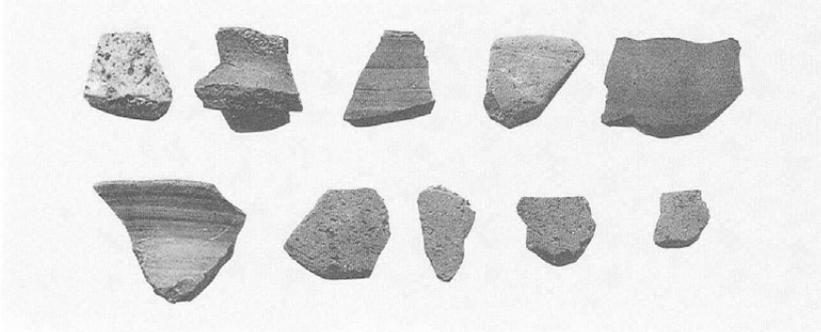
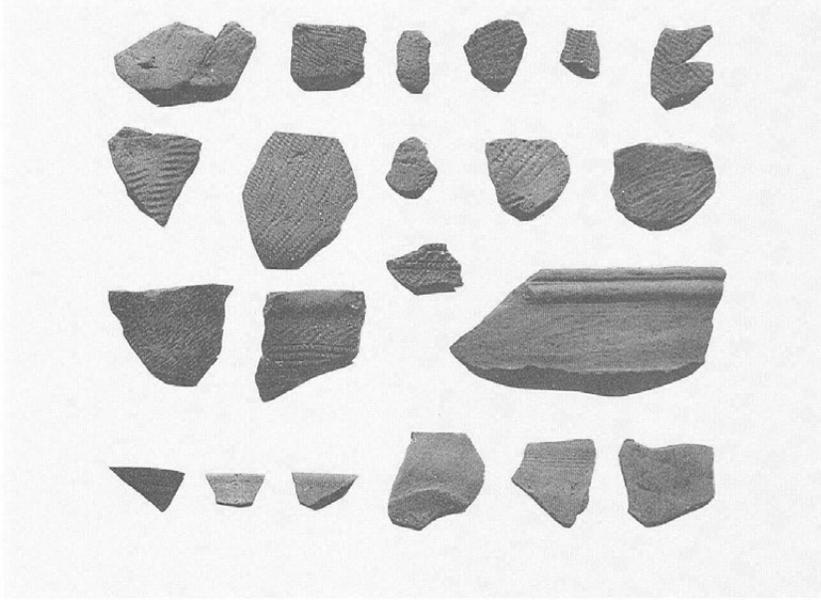
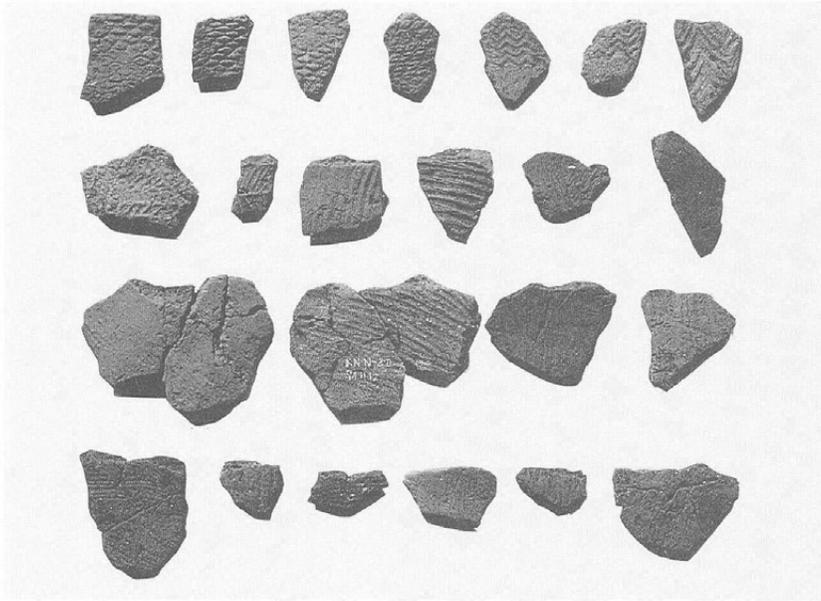
↑17 Nトレンチ3の土層断面

→18 調査地点の埋め戻し完了風景



→19 遺跡から見た竜宮社地の森





↑ 20 上林中道南遺跡試掘調査出土土器写真

↑ 21 同石器写真

上林チェーンベース建設予定地内試掘調査報告書

上林中道南遺跡 II

発行日 平成7年(1995)1月30日

発行者 長野県下高井郡山ノ内町大字平穏 3352
山ノ内町教育委員会

印刷 長野市柳原 2133-5
ほおずき書籍株式会社

